

Alfred Spira, Nathalie Bajos et le groupe ACSF,  
*Les comportements sexuels en France,*  
 La Documentation Française, Paris, 1993, 352p.

本書は国立エイズ研究機構の要請に基づき、1991年9月から1992年2月にかけてフランス全土で18～69歳の男女約2万人を対象として実施された、性行動調査の第1次報告書である。これは評者が昨年6～7月のINED(国立人口研究所)滞在中に調査グループの一員のH. Leridon 社会人口学部長から教えられ、プレス発表用暫定結果や調査実施過程の映像をテレビで見てから待ち望んでいたもので、期待を裏切らないものであった。同報告書が研究省大臣への報告書であることからわかる通り、この調査はエイズ対策のための国家的研究プロジェクトとして、INSERM(国立保健医学研究所)に所属する2人の代表者をはじめとする27名の疫学、人口学、社会学、心理学、統計学、経済学等の専門家から成るACSF(フランス性行動分析)グループによって設計、分析されたものである。調査の主たる目的はエイズに関して危険だと考えられている行動、特に同性愛、不特定多数との性交渉、売春、薬物使用に関する行動を明らかにすることであった。

本書は第1次報告書とはいえず、大部のもので次の9章と調査票等から成っている。第1章は「序論」で歴史、調査目的、諸外国の性行動調査について述べられている。第2章の「調査実施の方向性」では調査の原則、性行動の定義、仮説と分析軸、性行動の記述について、第3章「調査の手順」では一般原則、試験調査の結果、調査組織、科学的・制度的評価、倫理的側面について、第4章「調査の対象」ではデータ収集作業、抽出標本について論じられている。第5章「性的活動」では一般的属性、最近の活動について、第6章「コミュニケーション、心理的性向、社会的環境」では社会的言説と規範の影響、パートナーとの対話、家族内コミュニケーションと性愛、性的快楽・機能障害・幻想・満足、性愛とエイズ予防に関する規範と表象、性的暴力、死生観について、第7章「危険な行動と予防手段」では危険な行動、コンドーム使用について、第8章「エイズと検査に関する社会的認識」ではエイズに対する社会的認識、HIV抗体検査について、第9章「感染の将来推計と拡散」では将来推計の方法、第1次的結果について論じられている。

章立てからも推測されるように、調査結果に関する記述より若干少ない紙数が調査方法に関する記述に充てられている。このような傾向は1970年のSimon 調査の報告書(本誌163号拙稿参照)でも見られるが、デリケートなテーマに関する調査であるためであろう。また、エイズ関連の部分を除き、報告書の構成も比較的似ている。両調査の比較(結果の簡単な比較については*Population et Société*紙の本年2月号参照)や外国調査との比較は来年出版される本報告書で行われるものと思われる。

同書の第1章によれば、他の西欧諸国でも同様な調査が実施されたり、計画されたりしている(昨年12月の*Nature*誌には本調査結果がイギリスの調査結果とともに掲載されている)。というのは、エイズ対策はその感染経路の性格上、性行動に関する正確な情報に基づく必要があるからである。しかし、米国では約4年前に同様な調査に対する科学研究費が議会の反対により止められてしまったため、同国のエイズ対策は遅れる可能性がある。わが国でも日本性教育協会による青少年を対象とする性行動調査があるが、全成人を対象とする大規模な全国サンプル調査はない。また、当研究所の全国出生動向基本調査(出産力調査)も男女の出会いや避妊に関する若干の質問を含むが、性行動そのものを主題にした調査ではない。現在のわが国では感染者数が比較的少ないが、この段階で科学的な調査を実施して正確な情報を得ておかないと予防には役立たないので、早急に西欧諸国と同様な調査の実施を検討する必要がある。また、米国の国際開発庁によるDHS(人口保健調査)も一部の国ではエイズに関する質問をしているが、わが国もODAの一環としてエイズ感染者が多い途上国で同様な調査に対する援助をすれば、世界のエイズ予防に貢献することができるであろう。(小島 宏)